
落の臺

セレナ・ナウビレッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

露の臺

【Nコード】

N2312C

【作者名】

セレナ・ナウビレッジ

【あらすじ】

19才の少女と、奥深い山で一人・画家として暮らす男とのひと冬の物語。

プロローグ

真冬のある日、雪深い山中を少女は彷徨っている。

まるで、何かに追われているかのように粗末な衣服をまとい、靴は雪山には耐えられない物を履き、冷え切る足を必死に動かし歩いて行く。

もう、どれくらいこの山中を歩いているのだろう、少女の意識は朦朧としていた。

少女は数え年で19、北方のとある商家に生まれたが、少女が10の年に母が病に倒れ看病の甲斐もなく他界、数ヶ月前に父が事業に失敗し家は没落したのであった。

父の全財産や土地を売ったところで借金は返すことはできず、年暮れに数人のヤクザ者が有無も言わず少女は都に連れて行かれたのであった。

翌日、少女は見たことのない華やかな街に到着した。大きな門を潜ると、左右・四方八方には格子の掛かった建物、西洋風の建物、街にはその建物の中を覗き込む男たちの姿、

そして建物の中には化粧をし、綺麗な着物をまとった女たちがいた。その光景を見ながら少女は、ある一軒の家屋に連れられた。そこに入り、神棚のある部屋に

通されてしばらくして、この屋の主人と女房が入って来た。

主人は少女をじーっと見つめ、口を開いた。

「今日からお前はこの屋で働いてもらう」

その言葉を聞いた少女は、初めて自分の置かれた状況が分かり愕然とした。

私はもう行くところがないのか・・・

花街に連れて来られて数週間の後、少女は夜見世に出されることになった。

とうとう来る時が来たという思いはあったが、むしろこの状況から抜け出したい

という気持ちの方が強かった。足抜けしたところで、捕まれば酷い仕置きが受けることは

分かってる、たとえ逃げ切れたとしても行く当てはどこにもない。

その夜、綺麗な着物を着せられ、化粧も施された少女は見世に出た。見世に出るのは初めてということで、客は馴染みの客を付けられた。客は長年この見世に通う中年の富豪だ。一人部屋にいる少女は恐ろしさのあまり、

身体中が震えた。そこに客が部屋に通され、少女と二人きりになった。

震える少女を見た客は、

「怖いのか？」と訊ねた。

少女は震えたまま、少し頷いた。

「心配ない、すぐに慣れる」

と客は言い、少女の着物を解こうとした次の瞬間、大きな爆音が響き渡った。

まもなくして、赤い炎が見世に近づいて来た。ここからすぐ近くの見世で出火した炎が

冬の乾燥のために、少女のそばにも近づこうとしていた。

少女は客を振り払ってその場を逃げた。外に出たところ瞬く間に炎は街中を燃やし、

慌てふためき逃げる女たちや客で抜け道を見つけられる状態ではなかった。

大勢の人間の波を駆け抜け、やっとの思いで街の門を抜け出した少女は一台の貨物車を

見つけ、しばし車の後ろに乗り身を休ませることにした。
身を隠し安堵した少女はいつの間にか眠ってしまい、少女の知らぬ
間にその車は走って行った。

雪山の中で

翌朝、少女は寒さで目が覚めた。外を眺めると、そこは一面雪が積もる山道だった。

少女は花街を抜け出せてほっとしたと同時に、急に不安になった。見世を抜け出せたが、

これからどこに行けばいいものか・・・

走り続ける車中で、少女は考え続けたのであった。

そんなことを考えているうちに、車は途中で止まった。

運転手に見つかるかとハラハラしている少女を横目に、運転手は車のドアを閉め、

積荷を降ろすことなくその場を立ち去った。

その隙を見て、少女はしばし時間を置いて車から降りた。

着の身着のまま花街を飛び出したため、寒さをしのげるのは羽織だけだった。

それでも少女は、雪深い山の中を身体をすくめながら歩き始めた。来ている物だけではなく、履いている物も雪山には満足には歩けない。

それでも少女は人里を探すべく、歩いて行った。

誰もいないことはわかっていたが、少女は誰かが後ろから追ってくるような気がして必死に歩いた。

どうか、どうか誰も追いかけて来ませんように...

辺りを見渡すと、山には鳥や獣のような足跡が無数にあった。

それらを見た少女は、追われている錯覚よりも山の中の怖さに気が付いた。

日が暮れる前に人里を探さなければ、早くしないと。

焦れば焦るほど少女の心の中は不安になり、必死に雪山を歩いて行った。

それから時間は過ぎ、上空から雪が降って来た。

最初はチラチラと舞う程の雪は段々強く降り、辺りは見えなくらいになってきた。

少女の足は、雪山を歩くには限界に近づいて来ていた。

このままでは私は死んでしまう、少女は疲れきった身体を必死に動かしているつもりだった。

しかし少女の身体は氷のように冷え、意識も朦朧とし今にも倒れそうだった。

そして次の瞬間、木々に積もった雪が少女の頭上に落下し、少女はそのまま気を失ってしまった。

しばらくして、倒れている少女の傍らに1匹の動物が近寄って来た。その動物は少女を見てから、遠くの方角を向いて大きな声で吠え出した。

無情にも、その後も雪は降り続けるのであった。

出逢い

少女は夢を見ているようだった。

暖かい春の日差しの草原に、亡き母が少女を待っているような気がした。

「お母さん会いたかった、もうずっと私のそばにいて!!」

そんな少女に母は何も言葉を発せず、ただ少女を見つめるだけであつた。

「どうして、何も言ってくれないの？」

そう言つた途端、母の姿は遠くなり少女は母を追いかけて行く。

「待って、行かないで!」

そう言つた途端、少女の身体は動かなくなり、そのまま草原に倒れ込んでしまつた。

「お母さん、お母さあ……」

火を焚く音で、少女は目が覚めた。

布団から起き上がるうとした時、少女は人肌を感じた。

少女のそばには、見知らぬ男が雪山で倒れた少女を包み温めていたのであつた。

少女は驚き起き上がり、男に背を向けた。

部屋の中には、暖炉と片隅にアトリエがあつた。

男は静かにその場を離れ、お湯が入つた夜間に手をやり、黙々と温かい飲み物を淹れはじめた。

「どうだ、気分は？」

「……」

黙り込む少女を、男は脈と脛を診て、

「もう大丈夫だな!」

飲み物を渡された時、一匹の大きな犬が少女のそばに近寄つてきた。

「コイツがいなかったら、君は今頃雪に埋もれてたぞ」

犬の愛くるしい表情を見た少女は、男が淹れた飲み物を少しずつ飲み始めた。

「・・・」

少し安心したようだが、少女は黙ったままだった。

「ウチはどこだ？落ち着いたら送って行こう」

男は少女にそう言って筆を取り、キャンバスに絵を描き始めた。

「・・・ありません」

男は筆を休め、視線を少女のところに向けた。

「家はありません」

少女の言葉に男は一瞬驚き、少女に聞いた。だした。

「ウチが無いって、どういうことだ？」

「・・・出て来たんです・・・働き口から・・・」

「そんなに仕事辛いなら、うちに戻ればいいじゃないか」

「辛くても私には帰る家がありません。両親も亡くなって、住む家もなくなっただから、

もう帰れないんです」

「!？」

男には少女の事情を知る由もなかったが、少女の切実な様子に男は何も言えなくなってしまうた。

「・・・あの、当分の間だけでも私をここに居させてくれませんか？

お手伝いがあれば、私一生懸命やります。お願いします」

「・・・わかった、当分の間だけだぞ」

それを聞いた少女はホッと、再び温かい飲み物を飲み始めた。

男も休めていた筆を、再びキャンバスに走らせたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312c/>

路の臺

2010年10月8日14時29分発行